

雑 録

本邦産菊の分類

北村 四郎

我が國の秋は菊屬の植物に依つて可成りの美しさが山野に加えられる。野生の菊には十九種と自然雜種が三つ知られ、可成り複雑であるので學術的分類を試みた。もつとも將來出すべき菊屬論文の豫報とも見てゐたゞき度い。*Chrysanthemum* L. Gen. Pl. (1764) p. 432. これは何か、LINNAEUS 氏は Josephi Pitton Tournfort 氏の *Institutiones Rei Herbariae* I (1719) p. 491 の *Chrysanthemum* 「TOURNF.」を採用してゐるから Tournfort 氏の *Chrysanthemum* が問題となる。これはそんなら何か、この本を読んで見ると記事はシュンギク *Chrys. coronarium* や *Chrys. segetum* の事である。これは一寸餘談であるが小泉先生からの御話によると Tournfort 氏は佛蘭西人であるがよほど學問のえらい人で植物の屬に充分立派な學識のあつた人で LINNAEUS 氏よりも學者としてはえらかつたと考へる分類學者が多いさうである。無論 LINNAEUS 氏は大學者ではあつたが然し彼程の人が植物分類學者の中になかつたのでなく、實は其の前にも其の後にも輩出してゐるので、この點我々が讀む手近の分類をやつたことのない人の生物學史の中には満足出來ぬところがある。經驗の深い分類學者が書けばこういふ點は正確となるであろうが、先づ無理な注文かもしれぬ。Tournfort 氏も生物學史の爲めに勉強したのではなからうから。

話は元に歸り *Chrysanthemum* の本體は Schulz Bipontinus が *Tanacet.* 15 でやつた如く一年草にして邊花の果實が明瞭な三角軸有翼であるシュンギク類で（これを Sect. *Pinardiae* Benth. et Hooker Gen. Pl. II (1873) p. 425 とする）無論家菊やノヂギク、シマカンキク等の類と異なる。毛唐人が栽培の家菊を見て金 (*Chryso*) の花 (*Anthemum*) とつけたのではない。*Chrysanthemum* 屬を小さく見る人はこれをシュンギクの類に止め、家菊の類に *Pyrethrum* を用ひる。大陸の學者 Cassini 氏、De Candolle 氏 Maximowicz 氏 Franchet 氏等はさうである。英國の學者は昔から大きく見て家菊の類は *Chrysanthemum* sect. *Pyrethra* (Gaertn.) Benth. et Hooker l. c. p. 426 としてゐる。Sabine 氏も *Chrysanthemum* を用ひたが Bentham, Hooker, Hemseley 氏等がこれで近年は *Chrysanthemum* が一般に用ひられてゐるが、*Pyrethrum* を用ひる事も決して不合理ではない。尙 *Chrysanthemum frutescens* L. —モクシュンギク— は多年草で下部は本質化し邊花の果實には明瞭な三角軸に翼が發達しカナ

リヤ島や亞弗利加に産するものでこれは sect. *Argyranthema* BENTH. et HOOKER l. c. p. 426 と云ふ。*Chrysanthemum segetum* は一年草で果實には 4-10 の鈍稜あつて翼がなくこれは sect. *Coleostephi* BENTH. et HOOKER l. c. p. 425 に入る。我が國に産するものは全部 *Pyrethrum* に入るべきものである。

Sect. ***Pyrethra*** (GAERTN.) BENTH. et HOOKER, l. c. p. 426, HOFFMANN in Pflanzenfamilien IV-5 (1894) p. 277.

Syn. *Pyrethrum* GAERTN. Fr. II (1791) p. 430 t. 169, DC. Prodr. VI (1837) p. 53, MAXIM. Bull. l'Acad. Sc. St. Péters.

多年生草木又は亞灌木。邊花及び心花の果實は圓柱形にして同様に 5-10 肋線あり。冠毛は發達したり又は殆んど缺く事もある。

Subsect. ***Dendranthema*** DC. Prodr. VI (1837) p. 62. sub *Pyrethro*, MAXIM. l. c. p. 421.

Syn. *Dendranthema* Des MOUL. in Actes Soc. Linn. Bord. XX (1855) p. 561.

多年生草本、下部木質化す。頭花は舌狀花あり稀に全部筒狀花よりなる。分岐せる枝の頂端に單生するかやゝ繖房狀時に密繖房狀花序につく。邊花及び心花の果實は殆んど同形で楕圓形多少灣曲する。表面は平滑で黑色を帯び 5-6 肋線あり。水に濕せば膨れて粘化する。冠毛なし。花盤上に舌狀花間中に *Palea* を生ずる事あり。

- 1). *Chrysanthemum morifolium* RAMAT. —キク— 東亞に廣く栽培さる。
- 2). *Chrysanthemum japonense* NAKAI. —ノヂギク— 瀬戸内海 (セトノヂギク) 阿波、土佐、伊豫、豊後、日向、大隅、薩摩、太島 (オホシマノヂギク)。
- 3). *Chrysanthemum Shimotomaii* MAKINO. —ニヂガハマギク— 周防、長門。
- 4). *Chrysanthemum Aphrodite* KITAMURA. —サンインギク— 長門、石見、因幡、丹後、越中。
- 5). *Chrysanthemum Makinoi* MATSUM. et NAKAI. —リウノウギク— 本州西南部磐城まで、四國。
- 6). *Chrysanthemum indicum* L. —アブラギク、ハマカンキク、シマカンキク— 支那、九州、四國、本州西南部山城まで。
- 7). *Chrysanthemum ornatum* HEMSL. —サツマノギク— 肥後、薩摩、屋久島。
- 8). *Chrysanthemum shiwogiku* KITAMURA sp. nov. = *Chrys. Decaisneanum* MATSUM. β *discoideum* MAKINO in Tokyo Bot. Mag. XXVI (1912) p. 399 fig. XXVIII. —シラギク— 土佐、阿波。紀伊 (キイシラギク)、伊勢 (キイシラギク)。

- 9). *Chrysanthemum parvicum* NAKAI. —イソギク— 安房、相模、伊豆、駿河。八丈島。
- 10). *Chrysanthemum lavandulaefolium* MAKINO. —キクタニギク、アワコガネギク、アブラギク— 支那、滿洲、朝鮮、本州西南部、磐城まで。
- 11). *Chrysanthemum arisanense* HAYATA. —アリスンアブラギク— 臺灣。
- 12). *Chrysanthemum morii* HAYATA. —モリギク— 臺灣、タロコ。
- 13). *Chrysanthemum sibiricum* FISCHER. —イハギク— シベリア、滿洲、朝鮮、九州、本州西南部白山まで。
- 14). *Chrysanthemum Pallasianum* KOMAROV. —オホイワインチン— 滿洲、朝鮮、樺太。
- 15). *Chrysanthemum rupestre* MATSUM. et KOIDZ. —イフインチン— 本州中部高山。

自然雜種—*Chrysanthemum leucanthum* MAKINO = *Chrys. lavandulaefolium* × *Chrys. Makinoi*. *Chrysanthemum Konoanum* MAINO = *Chrys. Makinoi* × *Chrys. rupestre*. *Chrysanthemum Kuwashimae* KITAM. = *Chrys. indicum* × *Chrys. Makinoi*.

Subsect. *Leucanthemum* DC. Prodr. VI (1837) p. 45 pro gen. Syn. Sect. *PhalacroGLOSSUM* DC. l. c. p. 45 sub *Leucanthemo*.

多年生草本。頭花は舌状花あり、莖に單生するか又は分岐せる枝の頂端に單生する。邊花及び心花の果實は殆んど同形で狭圓柱形明瞭に約 10 肋線あり。水に濕せども膨れて粘化する事なし。冠毛なし。

- 1). *Chrysanthemum arctim* L. —チシマコハマギク— カムチャツカ、樺太、散江、北千島 (チシマコハマギク)。得撫擇捉、色丹、根室 (オホバチシマコハマギク)。—北米、カムチャツカ、シベリア。

Subsp. *Gmelinii* KITAMURA comb. nov. = *Leucanthemum Gmelinii* LEDEB. Fl. Ross. II (1845-46) p. 541. —アキノコハマギク— 樺太、カムチャツカ。

Subsp. *Maekawanum* KITAMURA nom. nov. = *Chrysanthemum yezoense* MAEKAWA in Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. VIII (1921) p. 12 Pl. I fig 5-13. —コハマギク— 北海道根室より本州北部太平洋岸塩釜まで。

- 2). *Chrysanthemum Weyrichii* MIYABE = *Chrys. littorale* MAEKAWA in Trans. Sapp. Nat. Hist. Soc. VIII (1921) p. 15. —ビレラギク— 樺太、北海道。

- 3). *Chrysanthemum lineare* MATSUM. —ミコシギク— 滿洲、朝鮮、九州、本

州西南部下總まで。

Subsect *Nipponicae* KITAMURA subsect. nov.

多年生、木質、灌木、約一米の高さに達す。莖は五生、多數密生、筒形無柄、肥厚。頭花は單生大。邊花の果實はやゝ三角軸 (triquetera) にして心花の果實より小さく多數の肋線あり多少灣曲し扁平である、頂部には極めて短かき冠毛あり。心花の果實は狹圓柱形にして多數の肋線あり頂部には明瞭に小冠狀で齒牙邊の冠毛がある。花盤は圓錐形、無毛。これは *Argyranthemum* と *Pyrethrum* との間である。

1). *Chrysanthemum nipponicum* MATSUM.—ハマギク—磐城、陸前、陸奥。

尙京都の人が昔圓山の菊谷に自生しそれを菊谷菊と云つて認識してゐた菊は目下やはり土地の好事家が大切に殘してゐるが、これは *Chrysanthemum lavandulaefolium* MAKINO である。今でも貴舟に行つても宇治に行つてもある。私は分類學を勉強したお陰で昔の眞葛ヶ原にあつた菊谷菊をなつかしむ事が至る處で出来る。

尙第三卷四號 p. 204 に發表した *Chrysanthemum indicum* var. *procumbens* なる組合せは既に中井博士朝鮮植物誌第二卷 p. 25 にあるのでこの學名の Author は *Chrysanthemum indicum* var. *procumbens* NAKAI とすべきで筆者の誤りを訂正する。

ヤブソテツの二變種

田 川 基 二

M. TAGAWA: Two varieties of *Cyrtomium Fortunei* J. SMITH.

昨年本誌第3卷第2號に日本のヤブソテツ屬の種類に就て記したが、その後山本肇氏によつてヤブソテツの一新變種と思はれるものが山城國乙訓郡大原野村灰谷に發見せられたからこゝにこれを追加し、なほヤマヤブソテツも同時にヤブソテツの變種に改めやうと思ふ。

この新變種はヤブソテツより大形で葉柄は 30-40 纏葉片は長さ 50-60 纏、幅 25-30 纏、羽片は 10-12 對、披針形で稍刀狀に曲り、漸次細くなつて先は鋭く尖つてゐる、基脚もヤブソテツやヤマヤブソテツよりは尖つてゐる、大いものは長さ 15 纏、幅 4 纏もある、邊緣には小さい鋸齒があり、なほその上に齒牙狀の缺刻があることもある、表面には全く光澤がない、包膜の中心は黒褐色で周圍より色の濃い點はオニヤブソテツに似てゐる。

大さや羽片の數はヤマヤブソテツに一致するが、羽片の形や包膜の色でヤブソテツともヤマヤブソテツとも區別のできるものである。一見ヤブソテツとは大に異なるも